二巻本「世俗字類抄」の所収語彙

――二巻本及び三巻本「色葉字類抄」との比較から――

三宅ちぐさ

一、はじめに

先に、「世俗字類抄」研究の第一段階として、出典注記を調査した。[注1] その結果、三巻本「色葉字類抄」及び十巻本「伊呂波字類抄」では、漢籍・漢文体の国書を中心とする典籍名が注記されているのに対して、七巻本「世俗字類抄」では、

。直接に引用したと考えられる典籍名として、「定家仮名遣」（出典注記を持つ語彙の約六割を占める）

・「吾妻鏡」・「古今注」・「太平記」・「関白家五十番哥合」等、

。「定家仮名遣」による間接的引用と考えられる典籍名として、「万葉集」・「源氏物語」・「日本記」（ママ）等、

すなわち、和歌関係の図書を中心とする典籍名が注記されていることが、明らかになった。

しかし、三巻本「色葉字類抄」において出典注記の施された語彙が二巻本及び七巻本「世俗字類抄」に集録されているかどうかを調査してみると、三分の二程度の語彙が集録されている。このように出典注記は施されていなくても、共通語彙がかなりあるため、出典注記の違いによって単純に両字類抄の語彙の性格を規定することはできない。

そこで、「世俗字類抄」の語彙の性格を知るために、書写年代は新しいが、古体を保っており、二巻本及び三巻本「色葉字類抄」と成立において密接な関係があると推定されている[注2]二巻本「世俗字類抄」の所収語彙を、比較調査してみることにした。

調査の底本としては、

二　　字類　」　天理図書館蔵本
七巻本　世俗字類抄」　尊経閣文庫蔵本複製版
巻本「世　　抄　　古辞書叢刊刊行会
二巻本「色葉字類抄」　尊経閣文庫蔵本
三巻本「色葉字類抄」　「色葉字類抄研究並びに索引本文索引編」中田祝夫・峯岸明共編　風間書房

を使用した。

二、漢語混在の状態

まず、二巻本「世俗字類抄」に掲載された語彙のうちで、漢語がどの程度の割合を占めているかを調査した。

平安時代における漢語使用の実態を解明するという意図のもとに、三巻本「色葉字類抄」に集録された漢語数を、意義分類の単位である各部別に示された峯岸明氏の御調査[注3]がある。比較の便宜上、それに習って二巻本「世俗字類抄」の漢語を、

。字音語、湯桶読、重箱読、字音語を含む連語等を漢語として算出する。

。一語に二種類以上の漢語表記が存在する場合、それらの用字数は漢語に算入しない。

。その語の頭音がその篇所属の語として相応しくない場合は、語数に算入しない。

等の基準に従って数え、両字類抄の調査結果を対照させてみると、表Ⅰのようになる。

表Ⅰ

二巻本「世俗字類抄」				部名	三巻本「色葉字類抄」			
漢語数	総語数	比率	順位		順位	漢語数	総語数	比率
8	127	6.3		天象		11	153	7.2
(2) 78	(2) 403	19.0 19.4	5	地儀	4又7	(125) 205	(125) 584	17.4 35.1
60	640	9.4		植物		54	748	7.2
30	532	5.6		動物		36	632	5.7
49	302	16.2	8	人倫	7又5	80	348	23.0
29	378	7.7		人体		33	425	7.8
(1) 110	(3) 541	20.3 20.3	4	人事	3又6	(197) 324	(198) 907	17.9 35.7
34	194	17.5	7	飲食	8	40	237	16.9
190	1032	18.4	6	雑物	6又4	324	1269	25.5
17	69	24.6	3	光彩	5又3	22	85	25.9
0	90	0		方角		2	85	2.4
38	100	38.0	2	員数	2	53	118	45.0
58	1395	4.2		辞字		63	1455	4.3
91	137	66.4		重点		131	155	84.5
1574	1872	84.1		畳字		4521	5016	90.1
(4)	(45)	8.9		諸社		(4)	(51)	7.8
(30)	(72)	41.7		諸寺		(19)	(50)	38.0
(22)	(122)	18.0		国郡		(20)	(132)	15.2
95	154	61.7	1	官職	1	217	262	82.8
(2)	(455)	0.4		姓氏		(2)	(495)	0.4
(9)	(106)	8.5		名字		(1)	(105)	1.0
2528	8766	28.8		総数		6162	13312	46.3

注。表中の数字で丸括弧を施したものは、固有名詞である。

。順位は、固有名詞及び辞字・畳字・重点の部を除き、純粋に意義分類に従っている一三の部を対象として、漢語の占める割合の高いものからつけた。

。三巻本「色葉字類抄」の順位で「又」として記してあるのは、地儀部の宮殿名と人事部の調曲名との固有名詞を除いた場合のものである。

二巻本「世俗字類抄」には、宮殿名も調曲名もほとんど掲載されていないので、それらを除き三巻本「色葉字類抄」と順位の比較をしてみると、表Ⅰのようになる。両字類抄共に、

。官職部が一番漢語の比率が高く、次いで員数・光彩と三位までは同じ順位を示している。

。以下、順位は一致しなくなるが、漢語の占める率が一六%以上の部は、地儀・人倫・人事・飲食・雑物の五部である。

。その他の部、天象・植物・動物・人体・方角は、一〇%以下の漢語混在率を示している。

すなわち、意義分類別漢語混在の状態は、ほぼ同傾向であるといえよう。

表Ⅰ

順位	二巻本「世俗字類抄」			三巻本「色葉字類抄」	
1		61.7	官職		82.8
2		38.0	員数		45.0
3		24.6	光彩		25.9
	16%以上				
4	人事	20.3		雑物	25.5
5	地儀	19.0		人倫	23.0
6	雑物	18.4		人事	17.9
7	飲食	17		地儀	17
8	人倫	16.2		飲食	16.9
	10%以下				
9	植物	9.4		人体	7.8
10	人体	7.7		天象	7.2
11	天象	6.3		植物	7.2
12		5.6	動物		
13		0	方角		
		5.8	平均		5.5

全体として、

(1)固有名詞を除く一般語における漢語混在の状態（諸社・諸寺・国郡・姓氏・名字の各部所収語彙及び地儀部の宮殿名・人事部の調曲名を除いた場合）についてみると、

	総語数	漢語数	比率
二巻本「世俗字類抄」	七九六一語	二四五八語	三〇・九％
三巻本「色葉字類抄」	一二二五六語	五七七九四語	四七・七％

で、漢語混在率の差は一六・八％

(2)純粋に意義分類に従う一般語における漢語混在の状態

（(1)から更に重点・畳字・辞字の各部を除いた場合）

についてみると、

	総語数	漢語数	比率
二巻本「世俗字類抄」	四五六二語	七二八語	一六・二％
三巻本「色葉字類抄」	五五三〇語	一〇七九語	一九・五％

で、その漢語混在率の差は、三・三％と多少ではあるが、二巻本「世俗字類抄」の方が低い事が明らかになった。特に、三巻本「色葉字類抄」に比べ、二巻本「世俗字類抄」において漢語混在率が低いのは、官職（三巻本「色葉字類抄」との比率の差　二一・一）、重点（八・一）、雑物（七・一）、員数（七・〇）、人倫（六・八）、畳字（六・八）という、分類項目の中では漢語混在率の高い部に多くなっていることが注目される。[注4]

三、語彙の意義分類別所収状態

次には、意義分類別の語彙の所収状態について調査した。

三巻本「色葉字類抄」は、二一の意義分類のうち、天象・地儀・植物・動物・人倫・人体・人事・飲食・国郡・官職の一〇部については、朱点一つを付すことで更に意義による細分類がなされている。峯岸明氏は、それらの細分類に、表Ⅱの意義分類の項のような名称をつけておられる。[注5] 人事部の場合、その細分類は意義によらず、辞字部と同様に表記に必要な仮名数の少ない語から配列してある。しかし、人事部の最後には音楽（調曲名）に関する語彙がまとめてあるので、一応調査対象に入れることにした。その他の部は、所収語彙数も少なく、配列に一定の傾向はうかがえるけれど、朱点により分類してあるというわけではないので、ここでは取り扱わない。

二巻本「世俗字類抄」と成立年代が近いと考えられている二巻本「色葉字類抄」も比較の対象とした。この字類抄には、細分類が施されていないのであるが、ここで扱う一〇の部については、所収語彙の内容、掲載順序共に三巻本「色葉字類抄」と全くといっても良いほどの一致をみせているので、詳細は記さない。

二巻本「世俗字類抄」にも、このような意義による細分類はなされていない。が、三巻本「色葉字類抄」と比較することにより、意義別の語彙の多少等、所収状態が把握できるわけである。そこで、各意義分類別に、三巻

本「色葉字類抄」の所収語彙数、二巻本「世俗字類抄」にも掲載されている共通語彙数、三巻本「色葉字類抄」の語彙の中で二巻本「世俗字類抄」との共通語彙が占める比率を、延べ語数（漢字表記の違いも含む掲出語すべての語数）、異なり語数（一語に対して存在する複数の漢字表記を算入しない場合の語数）、それぞれについて調査し、表Ⅱにまとめてみた。

注 丸括弧内の数字が延べ語数、丸括弧外の数字が異なり語数である。

たとえば、天象部天象に属する語彙についてみると、二巻本「世俗字類抄」と三巻本「色葉字類抄」とを比較した時、二巻本「世俗字類抄」にしかみられない語彙数は、一九一語のうち八語、「宿所」・「宿」・「今季」・「雫」・「蹤」（本ノママ）・「和霧」・「凍」・「旬」のみで、二巻本「世俗字類抄」の三巻本「色葉字類抄」に対する一致度は九五・八％である。二巻本「世俗字類抄」のほとんどの語彙は、三巻本及び二巻本「色葉字類抄」に収められているわけである。これを頭に置いて、逆に三巻本「色葉字類抄」の語彙のうちで二巻本「世俗字類抄」にも収められている共通語彙数の比率をみると、四八・〇％であり、三巻本「色葉字類抄」の半数足らずの語彙しか、二巻本「世俗字類抄」には収められていないことになる。ところが、延べ語数に関する共通語彙数の比率は低くても、異なり語数においては八八・〇％であり、三巻本「色葉字類抄」に所収されているほとんどの語彙が、二巻本「世俗字類抄」にも収められているわけである。程度の差こそあれ、同じ傾向が他の意義分類別細分類にも顕われている。すなわち、二巻本「世俗字類抄」と三巻本及び二巻本「色葉字類抄」との所収語彙数の差は、主として、二巻本「世俗字類抄」には同義異表記語が掲載されていないことによって生じているのだということが明らかになった。本文（後記）を見ても、同義異表記語彙が余り掲載されていないことは一目瞭然である。このことは、両字類抄の性格を考える上で重要な意味を持つと思われる。果して、かなりの数に及ぶ同義異表記語彙がすべて、広く文献の著作に用いられていたのであろうか。一般的に用いられていたのは、二巻本「世俗字類抄」に集録されている表記の語彙ではなかったのだろうか。

その他の、意義分類別語彙の所収状態に関する二巻本「世俗字類抄」と三巻本及び二巻本「色葉字類抄」の違いとしては、

。二巻本「世俗字類抄」には、地儀部の宮殿名が、伊篇「悠記」、志篇「進物所」の各一例の他には収め

表Ⅱ

意義分類		二巻本「世俗字類抄」		三巻本「色葉字類抄」		比率
天象	天象	(107)	66	(223)	75	(48.0) 88.0
	歳時	(84)	58	(199)	92	(42.2) 63.0
地儀	地理	(239)	157	(464)	203	(51.5) 77.3
	居処	(253)	204	(461)	263	(54.9) 77.6
	宮殿名	(2)	2	(129)	129	(1.6) 1.6
植物	草類	(438)	328	(732)	439	(59.8) 74.7
	葛類	(18)	14	(25)	16	(72.0) 87.5
	木類	(287)	206	(410)	240	(70.0) 85.8
	蓮類	(19)	11	(23)	12	(82.6) 91.7
	藻類	(48)	32	(74)	38	(64.9) 84.2
動物	羽族類	(179)	134	(306)	167	(58.5) 80.2
	毛群類	(183)	148	(341)	199	(53.7) 74.4
	竜魚類	(89)	76	(165)	95	(53.9) 80.0
	亀貝類	(61)	43	(102)	56	(59.8) 76.8
	虫多類	(138)	104	(255)	125	(54.1) 83.2
人倫	親戚	(69)	48	(92)	58	(75.0) 82.8
	品秩	(212)	162	(389)	225	(54.5) 72.0
	鬼神	(46)	38	(64)	50	(70.3) 76.0
人体	形体	(279)	211	(460)	258	(60.7) 81.8
	病瘡類	(150)	125	(283)	171	(53.0) 73.1
人事	一仮名表記語	(13)	13	(21)	21	(61.9) 61.9
	二仮名表記語	(151)	95	(633)	138	(23.9) 68.8
	三仮名表記語	(286)	153	(1689)	235	(16.9) 65.1
	四仮名表記語	(158)	104	(960)	193	(16.5) 53.9
	五仮名表記語	(69)	51	(296)	103	(23.3) 49.5
	六仮名表記語	(5)	5	(48)	20	(10.4) 25.0
	七仮名表記語	(2)	2	(10)	10	(20.0) 20.0
	音楽	(3)	3	(199)	199	(1.5) 1.5
飲食	飲食名付飲食具	(194)	159	(366)	222	(53.0) 71.6
	飲食体	(12)	9	(34)	18	(35.3) 50.0
国郡	国郡	(68)	68	(70)	70	97.1
	名所	(48)	48	(61)	61	78.7
官職	公家	(144)	144	(252)	250	(57.1) 57.6
	臣家	(0)	0	(6)	6	0
	仏家	(0)	0	(50)	50	0

られていないこと。

。人事部の音楽（調曲名）が、保篇の一例「弄槍」、左篇の二例「催馬楽」・「狭鱸河」の他には収められていないこと。

。官職部の臣家・仏家に属する語彙が、全く収められていないこと。

。異なり語数について、七〇％以上の一致度を示す意義による細分類の多い中で、飲食部の飲食体は五〇・〇％、官職部の公家は五七・六％、天象部の歳時は六三・〇％と低い率を示していること。

があげられる。

意義分類ではないが、人事部で、二仮名表記以上のものについては、表記仮名数が多くなるほど、六八・八％、六五・一％、五三・九％、四九・五％、二五・〇％、二〇・〇％と、二巻本「世俗字類抄」にも掲載されている共通語彙数の率が低くなることも、両字類抄の語彙の性格を考える上で注目に値する事実である。

四、畳字部における語彙の所収状態

畳字部は、二一の部の中では最も語彙数が多く、諸本によって語彙の違いが大きく表われている部である。そこで次には、各字類抄の畳字部における意義分類別語彙の所収状態から、二巻本「世俗字類抄」の性格をさぐってみたいと思う。

三巻本「色葉字類抄」の畳字部は、音読の熟語、訓読の熟語に二分され、それぞれ熟語を構成する字数の少ない順序で（ほとんどが二字の熟語であるが）配列されている。その上に、音読の熟語は、三六部一〇六分に意義分類を示す注記が施されている。その三巻本「色葉字類抄」と二巻本「世俗字類抄」、二巻本「色葉字類抄」をも対照させてみると、両二巻本の語彙は、九十％以上の割合で三巻本「色葉字類抄」に一致している。この場合の一致というのは両二巻本に音訓を示す注記がほとんどないことから、漢字表記を中心とし、その語の所属する篇の音を参考にしての判断である。

一致する度数の高い部からあげていくと、表Ⅲのようになる。

㊟。部名に付した番号は、畳字部内での配列順序を示す。

。数字は、左――二巻本「世俗字類抄」、中――三巻本「色葉字類抄」、右――三巻本「色葉字類抄」の所収語彙数に対し、二巻本「世俗字類抄」にも掲載されている語彙数が占める比率、上段――二巻本「色葉字類抄」である。

表Ⅲ

⑥法家分	①証拠分	②発覚分	③評定分				計
2 9 59.2 22 49 44.9	5 83.3 6 6	1 3 33.3	±1 11 14 78.6				+8-2 46 63.8 40 72 55.6
⑦仕官部	①近習分	②縦容分	③疎遠分	④雑役分			計
14 51.9 12 27 44.4	7 11 63.6	3 6 50.0	1 50.0 0 2	2 3 66.7			+3 27 55.1 24 49.0
⑧古今部	①先後分	②終始分	③将来分	④遅速分			計
±1 6 25 24.0	2 3 66.7	3 6 50.0	6 8 75.0	6 54.5 8 11 72.7			+1-3 29 43.4 25 53 47.2
⑨剛史部	①吏幹部						計
4 26 49.0 22 51 43.1 1	3 2 3 66.7						+5-1 28 51.9 24 54 44.5
⑩人情部	①淳愛分	②忠信分	③稍誠分	④正直分	⑤慈悲分	⑥仁愛分	
12 65 59.1 56 110 50.9 3	1 1	1 20.0 2 5 40.0	2 33.3 1 6 16.7	3 37.5 2 8 25.0	3 7 42.9	5 55.6 4 9 44.4	
	⑦施恩分	⑧傲慢分	⑨放逸分	⑩不遜分	⑪无礼分	⑫不善分	
	4 16 25.0	3 5 60.0	2 4 50.0	4 7 57.1	10 71.4 7 14 50.0	13 17 76.5	
	⑬怨怨分	⑭呵嗔分	⑮同心分	⑯詐偽分	⑰強頑分	⑱疎邪分	
	2 3 66.7	±2 10 31 32.3 (訓1)	4 30.7 3 13 23.1	6 42.9 7 14 50.0 (訓1)	5 11 45.5	2 8 25	
	⑲賢知分	⑳思慮分	㉑疑慮分				計
	3 14.3 2 21 9.5	4 6 66.7	±1 6 13 46.2				+23-8 156 48.0 143 329 43.5
⑪人事部	① 沈淪分	②家業分	③婚姻分	④近遠分	⑤近親分	⑥貢献分	
±1 17 42 40.5	2 3 66.7	8 42.1 7 19 36.8	2 13 43.3 12 30 40.0 1	2 8 27.6 729 24.1 1	11 13 84.6	7 70.0 6 10 60.0	
	⑦称誉分	⑧失誤分	⑨独歩分	⑩秘密分	⑪動静分		計
	3 42.9 2 7 28.6 (訓1)	7 12 58.3	2 6 33.3	3 27.3 2 11 18.2	3 5 60.0		+9-3 84 44.9 78 187 41.7
⑫資用部	①計数分	②家計分	③運賃分	④方略分	⑤借用分	⑥商賈分	計
7 53.8 6 13 46.2	11 47.8 10 23 43.5	±1 6 15 40.0	0 3	5 17 14 39.5 2 43 32.6	3 21 61.8 19 34 55.9 (訓1) 1	7 53.8 4 13 30.8	+14-4 69 47.9 59 144 41.0
⑬公事部	①弁済分	②流例分	③賑給分	④撰択分			計
2 40.0 1 3 33.3	4 33.3 5 12 41.7	4 14 28.6	3 4 75.0	±1 4 10 40.0			±2 17 43 39.5
⑭既期部	①左遷分	②放逐分	③放還分	④追放分			計
5 15 33.3	1 1	±1 2 7 28.6	1 1	2 4			±1 11 28 39.3
⑮騒乱部	①紛議分	②奮発分	③発狂分	④非常分	⑤恥辱分	⑥煩擾分	
13 54.2 12 24 50.0	11 55.0 10 20 50.0	3 6 50.0	0 3	9 69.2 5 13 38.5	3 42.9 2 7 28.6	4 17.4 6 23 26.1	
	⑦鼓乱分						計
	±1 4 13 30.8						+9-4 47 43.1 42 109 38.5
⑯武芸部	①舞服分	②争論分	③怨敵分				計
12 28 42.9	±1 3 17 17.6	3 30.0 2 10 20.0					+2-1 22 36.7 21 60 35.0
⑰医方部	①疾病分	②更発分	③時行分	④辛苦分	⑤苦悩分	⑥煩悩分	
±1 6 17 35.3	±1 8 26 30.8	1 1	1 0 1	1 1	1 1	1 0 2 50.0	
	⑦眩目分						計
	0 2						+1-2 19 37.3 17 51 33.3

(23)行旅部	①驛留分	②使者分	③駅伝分	④過客分	⑤出入分	⑥往来分	
14 43.8 11 32 34.4	7 53.8 8 13 61.5	0 1 11 9.1	2 10.5 1 19 5.3	±1 5 13 38.5	4 66.7 5 13 38.5	5 6 83.3	
	⑦行歩分						計
	2 12 16.7 2 12 16.7					39 38 112 33.9	+5-4 39 34.8 38 112 33.9
(22)下賤部	①僕從分	②傭僕分	③貧賤分				計
5 27.8 2 18 11.1	5 55.6 4 9 44.4	0 5	3 22 50 44.0 (別1) 50 40.0 1				+7-1 32 39.0 26 82 31.7
(6)仏法部	①円典分	②寺家分	③法会分	④教教分	⑤僧侶分		計
6 35 50.0 30 70 42.8 1	7 11 42.3 5 26 19.2 1	3 26 11.5	2 8 27.6 7 29 24.1 1	0 2	11 33 26 73 35.6 4		+26-7 90 39.8 71 226 31.4
(18)言語部	①然語分	②弊弊分					計
±1 11 45 24.4	7 63.6 4 11 36.4	3 60.0 4 5 80.0					+4-2 21 34.4 19 61 31.1
(16)人体部							計
4 16 36.4 13 44 29.5 1							+4-1 16 36.4 13 44 29.5
(30)飲食部	①器物分	②饗宴分	③酒酒分	④八木分			計
±3 16 31 51.6	2 8 25.0	2 5 3 50.0 2 6 33.3 1	±2 9 46 19.6	0 9			+7-6 30 30.0 29 100 29.0
(21)朋友部	①資家分	②交分分	③集会分				計
10 30 33.3	0 8	3 20.0 2 15 13.3	14 35.9 13 39 33.3				+2 27 29.3 25 92 27.2
(9)公卿部	①結賀分	②宴酒分	③位階分	④礼節分			計
6 16 37.5	6 18.8 5 32 15.6	6 30.0 5 20 25.0	1 5.3 3 19 15.8	7 11 63.6			±2 26 98 26.5
(2)地 部	①遠近分	②荒廃分	③郷里分	④田舎分	⑤豊饒分		計
6 6 2 16.7 5 54 9.3 1	7 15 46.7	1 11.1 3 9 33.3	3 14 42.4 13 33 39.4 2 33 39.4	±1 12 43 27.9	1 6 16.7		+9-6 44 27.5 41 160 25.6
(3)国郡部	①郷閭分	②國案分					計
0 4 27 11.1 4	1 14.3 3 7 42.9	4 5 80.0					--6 5 12.8 11 39 28.2
(4)衣装部	①烏帽部	②帶 分					計
6 9 37 16.2 24.3	1 7 14.3	1 3 33.3					+3 14 29.8 11 47 23.4
(12)陸陽部	①祥瑞分	②喜慶分	③表相分	④吸収分	⑤風雅分	⑥不動分	
3 75.0 2 4 50.0	0 10	0 1	0 1 2 50.0	2 5 35.7 4 14 28.6 1	0 1		
	⑦卜筮分	⑧無年分					計
	3 60.0 2 5 40.0						+4-1 12 30.0 9 40 22.5
(24)文章部	①入学分	②才智分	③弁才分	④教誡分	⑤教導分	⑥教授分	
5 12 22.6 8 53 15.1 (別1) 1	1 9 11.1	3 11 32.4 9 34 26.5 1	0 4	1 16.7 0 6	3 11 81.8	3 9 33.3	
	⑦文学分	⑧文章分					計
	6 14 14 35.9 29 23.1 1	4 26 14.3					+15-3 55 34.7 43 193 22.3
(14)人倫部	①先祖分	②父母分	③夫婦分	④美女分	⑤善人分	⑥長者分	
±3 9 35 25.7	2 22.2 1 9 11.1	8 30.8 4 26 15.4	3 13 54.2 11 24 45.8 1	5 13.9 4 36 11.1 (別1)	7 41.2 5 17 29.4	1 6 16.7	

	(7)少壮分	(8)老耄分	(9)民俗分	(10)孝子分	(11)品秩分		計
	4 51 12. 4 51 12.9 (訓1)	1 6 7 31 22.6 2	2 22 9.1	1 8 12.5	5 55.6 4 9 44.4		+16-6 63 53 254 20.9
08 伎芸部	(1)工匠分	(2)音楽分					計
1 40.0 2 10 20.0	1 7 36.8 8 19 42.1 2	2 3 7.5 2 10 5.0 1					+5-3 14 20.3 12 69 17.4
(5)神祇分	(1)祭祀分	(2)霊異分					計
5 8 30.8 4 26 15.4 1	3 42.9 1 7 14.2	1 11 9.1					+7-1 12 27.3 6 13.6
(3)山岳部							計
3 24 12.5							3 24 12.5
(2)尊者部	(1)富貴分						計
5 23.8 3 21 12.3	2 20 10.0						+2 7 17.1 5 41 12.2
09 牛馬部	(1)車馬分						計
8 40.0 4 20 20.0	0 13						+4 8 24.2 4 33 12.1
(7)帝王部	(1)天子分	(2)公侯分	(3)賤貴分	(4)政治分	(5)使約分	(6)百城分	
3 12.5 1 24 4.2	0 5	2 33.3 0 6	2 11.1 0 18	6 14 21.9 10 64 15.6 2	2 4 50.0	3 12.5 0 24	
	(7)服飾分	(8)朝廷分	(9)太平分	(10)無為分			計
	0 4	4 36.4 3 11 27.3	1 5 20.0	1 2 50.0			+16-2 30 19.2 18 167 10.8
(1)天 部	(1)時節分	(2)年月分	(3)晨夜分	(4)時刻分			計
3 4.1 8 74 2.7	3 9.7 4 31 12.9	1 4.2 0 24	8 16 26.2 4 61 14.8 1	7 25.0 5 28 17.9			+12-2 30 13.8 20 218 9.2
(4)同物部	(1)角樹分						計
2 1 33 3.0	+1 2 15 13.3						+2-1 4 8.3 3 48 6.3
(8)后妃部							計
0 17							0 17 0
09 灯燭部							計
							0 3 0
							総計
							1135 33.9 987 3350 29.5
07 雑 部							計
172 555 58.1 408 954 42.8 (訓1) 25							+172-25 555 58.1 408 954 42.8
08 両合字							計
2 46 50.5 50 91 54.9 (訓1) 6							+2-6 46 50.5 50 91 54.9
09 長短字							計
4 17 18.9 14 90 15.6 1							+4-1 17 18.9 14 90 15.6
訓読語							
294 559 82.7 268 676 38.5 (訓2) 3							

表Ⅲ

| | | |

この結果を、各字類抄別に、細分類の三六部それぞれに属する語彙数が占める率の高いものから配列した表Ⅲと考えあわせてみると、二巻本「世俗字類抄」の特徴として、

。各字類抄共に人情部が語彙数の最も多い部であるが、三巻本「色葉字類抄」と比べても、次に続く人事部と比べても、人情部がかなりな高率を示していること。

。三巻本「色葉字類抄」に比べて、比率がかなり低い部として、天部、帝王部、人倫部、文章部、河海部等があること。

。逆に、三巻本「色葉字類抄」に比べて、比率の高い部として、法家部、資用部、闘乱部、仕官部・古今部、刺史部等があること。

に注目することができる。三巻本「色葉字類抄」と比べ、掲載率の差が少ないとはいうものの、

。后妃部、灯燭部に属する語彙は全く集録されていないこと。

。分によっても、

・下賤部四分類のうちの僮僕分一、

・仏法部六分類のうちの釈教分一、

・飲食部五分類のうちの八木分一、

・朋友部四分類のうちの賓客分一、

・陰陽部九分類のうちの祥瑞分・喜瑞分・早涼分・不熟分・無年分の五つの分、

・牛馬部二分類のうちの輿車分一、

のように全く集録されていないものがあること。

意義分類からは離れるが、

。長畳字中の故事成語はほとんど集録されていないこと。

も注目に値する。

二巻本「色葉字類抄」は、他の部における語彙の意義分類別所収状態に関しては、三巻本「色葉字類抄」に全くと言って良いほど一致していたのであるが、共通語彙数（畳字部の全語数にほぼ相当する）が、三巻本「色葉字類抄」三三五〇語のうち、二巻本「世俗字類抄」では九八七語に対して、二巻本「色葉字類抄」では一一三五語と一四八語増加してはいるものの、三六部のうち三分の一にあたる一二部までが、二巻本「世俗字類抄」と同じ順位を示している。のみならず、二巻本「世俗字類抄」の特徴として前に記した六項目全てについても同様の指摘ができ、畳字部の語彙所収状態については、二巻本「世俗字類抄」の方により近いことが目につく。従って、二巻本「世俗字類抄」の畳字部に顕われた傾向は、この字

類抄の性格というより、編纂年代の違いからくる変遷過程上の特徴というべきであろう。

しかし、二巻本「世俗字類抄」に比べ、「色葉字類抄」系においては、二巻本から三巻本へと天部・帝王部が極めて増加し、古今部が減少するという違いがある。又、この結果に対して、二巻本及び三巻本「色葉字類抄」より後に成立し、二巻本「世俗字類抄」と同じく「世俗字類抄」の呼称を持つ七巻本「世俗字類抄」を照合してみると、川瀬一馬博士が「古辞書の研究」[注6]で述べておられる通り、「独自の改編・増補が多く加えられてゐる」と

例(注)。三巻本「色葉字類抄」を底本にして，左肩の番号―二巻本「世俗字類抄」，右肩の番号―七巻本「世俗字類抄」

。注記の多くは省略する。

。「世俗字類抄」系では語彙のみでなく，語の配列順序も同じであることが多い。

∴伊：天象付歳時

①① ④⑪ ③ ②②

・雷　留公同　留師同　遣同　遣同　雩同　晶同

③　④④　⑤　⑩

豊降同　霹靂同　豊隆　電　牽牛

多⑩

河鼓同　月暈同　月院同

⑥⑥

・古　以往同　終古同　既往同　往同

曽同　蒼同　故同　昔同　昔同

⑦⑦

今　時同　肆同　此同

はいうものの、二巻本「世俗字類抄」とは、上記の伊篇天象の部の本文例からも明らかなように、又、他の篇部でもこれと同様にかなりの語彙が共通しており、そればかりではなく、語彙の配列順序も一致することが多いのである。従って、畳字部の語彙の意義分類別の多少についても、同様の傾向を示すことになる。畳字部の意義による細分類項目のうち、三巻本「色葉字類抄」に対し、二巻本「世俗字類抄」にも収められている共通語彙数の割合の高い方から五部、低い方から五部の一部分を用いて、七巻本「世俗字類抄」にもある語彙数を並記してみると、表Ⅳのようになる。ただし、七巻本「世俗字類抄」は巻三（ヨーナ）を欠いており、又、登・寸各篇には部分的欠損がみられるため、確認不可能な語彙もある。

以上の二点、

。「色葉字類抄」系に比べ、「世俗字類抄」系では天部・帝王部の語彙が極めて少ないこと。

。二巻本及び三巻本「色葉字類抄」より後に成立した七巻本「世俗字類抄」においても、畳字部中の各部・分における語彙の多少が、二巻本「世俗字類抄」と同様の傾向を示していること。

から考えて、「世俗字類抄」系か「色葉字類抄」系かによって、所収語彙の意義的範疇に性格の違いが顕われて

表N

							計	比率
法家部 22,⑩49③	証拠分 6,③6⓪	発覚分 1,①3⓪	評定分 11,⑧14①				(4.1)(2.1) 40, 72	55.6
任官部 12,⑧27	近習分 7,③11	縦容分 3,①6	疎遠分 0,⓪2	継受分 2,②3⓪			(2.4)(1.5) 24, 49	49.0
古今部 6,⑤25	先後分 2,⓪3	終始分 3,⓪6⓪	将来分 6,③8	遅速分 8,⑤11①			(2.5)(1.6) 25, 53	47.2
刺史部 22,⑬51②	主幹分 2,①3①						(2.4)(1.6) 24, 54	44.5
人情部 56,⑮110⓪	孝養分 1,①1	忠信分 2,①5⓪	精誠分 1,⓪6①	正直分 2,①8⓪	惡悲分 3,②7⓪		(14.5)(9.8) 143, 329	43.5
帝王部 1,①24	天子分 0,⓪5⓪	妥駕分 0,⓪6⓪	践祚分 0,⓪18③	政理分 10,⑦64⑤	倹約分 2,⓪4⓪		(1.8)(5.0) 18, 167	10.8
天部 2,②74	時節分 4,②31	年月分 0,⓪24	晨夜分 9,①61	時尅分 5,④28①			(2.0)(6.5) 20, 218	9.2
河海部 1,①33	舟楫分 2,②15						(0.3)(1.4) 3, 48	6.3
灯燭部 0,⓪3①							(0.1) 0, 3	0
后妃部 0,⓪17							(0.5) 0, 17	0
計							987, 3350	29.5

(注)。数字の左―二巻本「世俗字類抄」、右―三巻本「色葉字類抄」。括弧内は、同字類抄内でその部の語が占める比率である。○は七巻本「世俗字類抄」

左上―二巻本「世俗字類抄」との共通語彙数

右上―三巻本「色葉字類抄」との共通語彙数

いるということができそうである。

三巻本「色葉字類抄」畳字部に集録された漢語について、峯岸明氏は、その性格や編者の採録態度を知るために有意義であるとして、天部晨夜分所収漢語を例に、実際には一般文献にどの程度利用されているものか。文献に使用されているこの類の漢語は、三巻本「色葉字類抄」に登録されているところでその総てが尽きるものか。という二点について、平信範の「兵範記」を対象とした調査をなさっている。[注7] それによると、三巻本「色葉字類抄」天部晨夜分には五三語の漢語が集録されているが、そのうち「兵範記」に用いられた同じ意義的範疇に属すると考えられる漢語七五語（和語の漢語表記をも含む）中に見られる語彙は二五語であるという。三巻本「色葉字類抄」に集録された語彙数と、それらのうちで「兵範記」に用いられた語彙数の比率を算出してみると、集録漢語の四七・二%、すなわち半数足らずが使用されているだけである。

それに対して、二巻本「世俗字類抄」において、天部晨夜分にあたると考えられる語彙は九語、「暁更」・「払暁」・「平明」・「白昼」・「早晩」・「晩頭」・「晩景」・「乗燭」・「旦暮」である。これら九語はすべて三巻本「色葉字類抄」にも収められておりそのうち「早

晩」・「旦暮」の二語を除く七語は「平範記」に用いられている。つまり七七・八%の利用度である。これだけの調査から確定することはできないが、このことは、同義異表記語彙の掲載が少ないこととも考えあわせると、二巻本「世俗字類抄」が、所収語彙は少ないながらも、一般文献において、利用度の高い漢語を集録していたことを示しているのではないだろうか。

五、おわりに

以上のように、二巻本「世俗字類抄」と二巻本及び三巻本「色葉字類抄」の所収語彙を比較した結果、

(1)同義異表記語彙の所収状態の違いとして、二巻本「世俗字類抄」には、同義異表記語彙が余り掲載されていないこと。

(2)意義分類別所収状態の違いとして、二巻本「世俗字類抄」では官職部の語彙が全体的にも少ないのだが、特に、臣家・仏家に属する語彙は全く収められていない他、地儀部の宮殿名、人事部の調曲名、飲食部の飲食体、官職部の公家、天象部の歳時という、公的場面で使用されることが多いと思われる語彙が少ないこと。

(3)畳字部語彙の意義分類別所収状態の違いとして、「世俗字類抄」系では、天部・帝王部など公的場面で使用されることが多いと思われる語彙がやはり少ないこと。

(4)漢語混在率の違いとして、二巻本「世俗字類抄」では、漢語混在率が低く、部の性格から当然漢語混在率が高いと考えられる部、官職・重点等でそれが特に目立つこと。

が明らかになった。その他にも、

(5)各部内部の整理状態の違いとして、「世俗字類抄」系では、音分類のための真仮名の使用状況に特徴があること。又、意義分類の門名及び配列に比較的異同が多く、細分類も、表記に必要な仮名数別の配列も行われていないこと。

(6)各系統別字類抄の増補状態の違いとして、「色葉字類抄」系では次第に増補され大部なものになっていったのに対し、「世俗字類抄」系では、増補よりも時代の必要に応じるための改編に力を入れたらしいこと。

(7)引用典籍を示す注記態度の違いとして、「世俗字類抄」系では、漢籍・漢文体の国書からの引用であることを示す注記を重視していないと考えられること。

等の相違点があげられる。

これらの諸事項に基づき、「世俗字類抄」は、その呼

称が示すように、「色葉字類抄」に比べ、より一般的・実用的な字類抄だったのではないかと考える。

注1.「七巻本『世俗字類抄』にみられる出典注記」
岡大国文論考第六号　昭和53年3月
二巻本「世俗字類抄」で出典注記が施されているのは一万余りの語彙のうち五例のみである。そのため考察の対象を七巻本「世俗字類抄」にしぼった。

2.『古辞書の研究』　川瀬一馬
大日本雄辯会講談社　昭和30年

3.「色葉字類抄研究並びに総合索引　黒川本影印篇」
中田祝夫共編　解説　昭和52年
峯岸明

4.三巻本「色葉字類抄」と二巻本「世俗字類抄」との畳字部における共通語彙九八七のうち、二巻本「世俗字類抄」で訓読されている漢語は一四語ある。逆に、二巻本「世俗字類抄」で音読されている訓読語は二語である。表Ⅲ参照。

5.注3に同じ。

6.注2に同じ。

7.注3に同じ。

（岡山大学大学院文学研究科研究生）

研究室受贈図書雑誌目録Ⅰ

（昭和五十五年一月～十二月）

単行本

増訂詩歌断想集　いのち流るゝ（西村耿月）
鈴木朖　人と学問（杉浦豊治）
紫式部日記の研究―紫女手簡を中心に―（木下美）
越前若狭地誌叢書　上（杉原丈夫・松原信之）
芸備口説き音頭集　上・中（広島女子大学）
国文学年鑑　昭和五十三年（国文学研究資料館）
日本の説話―ハナシの世界―（国文学研究資料館講演集1）
国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録　一九七九年
国文学研究資料館蔵逐次刊行物目録　一九八〇年
謡曲曲名索引（国文学研究資料館）
索引書類リスト（国文学研究資料館）
日本の昔話29　信濃の昔話（岩瀬博・太田東雄・箱山貞太郎）
信州小川村の昔話（日本口承文芸協会）

雑誌・紀要

愛知淑徳大学国語国文　第三号
愛文　第十六号（愛媛大学）
跡見学園国語科紀要　27